

# 表達習慣性動作的 Suru 和 Shiteiru —性質敘述性與外部觀點性—

吉田妙子

政治大學副教授

## 摘要

動作的完整動貌是指「掌握動作的整體」。當 Suru 完整動貌表達習慣性的動作時，習慣的開始與結束完全排除在考慮之外。也就是說，完整動貌是具有超越時間範圍的普遍性的。所謂「掌握習慣的整體」，是與「對主事者的性質敘述」相關聯的。經由回憶句測試法，能對 Suru 的性質敘述性作合法度判斷。

相對地，本來應是超越時間。具有普遍性的習慣性動作，因某種原因而必須侷限於目前的習慣狀況時，則使用進行動貌 Shiteiru 來表達這種習慣性動作。也就是，當說話者一定得從動作的連續狀況中跳脫出來時，就要使用 Shiteiru 來表達習慣。這些情況包含下列三種：以現在為中心，在這段時間範圍內所發生的動作，成為問題的核心時；當動作主的動作非說話者所能掌控時；由外部（前後文）賦予參照事項時。

關鍵詞：完整動貌，進行貌，動作的開始與結束，動作的反覆，  
參照時間

***Suru* and *Shiteiru* for Expressing Habitual Actions  
--Nature of Describing Characteristics Description  
and External Viewpoint--**

YOSHIDA, Taeko

Associate Professor, National Cheng-Chi University

**Abstract**

The perfective aspect means “grasping actions in its entirety”. The perfective aspect *Suru* in Japanese, for example, denotes customary actions only when the starting -point and end-point are not taken into consideration. That is to say, the perfective aspect has the “universality that transcends times. grasping the habit in its entirety”, moreover, is related to the description of the characteristics of the agent. Thus the nature of *Suru* describing characteristics becomes evident through applying the recollection-sentence-test.

However, if habitual actions, supposed to be denoted by *Suru*, which has the “universality” and transcends times, are, for some reason, located in a present time frame, then the continuous aspect *Shiteiru* is used instead. That is, when the speaker is obliged to jump out of a chain of repeated actions, *Shiteiru* is used to express repeated actions. This usage is employed in the following three situations: ① when the action becomes the focus within the present time frame, ② when the agent’s behavior is out of the speaker’s control, and ③ when a referential situation is additionally given.

Keywords : perfective aspect, continuous aspect, starting-point and end-point, repeated actions, reference time

# 習慣行為を表わすスルとシテイル —性質叙述性と外部視点性—

吉田妙子

政治大学副教授

## 要旨

行為の完成相は、「行為のまるごと把握」をすることである。完成相スルが習慣的行為を表すのは、習慣の開始と終了が全く問題にならない場合である。即ち、完成相は時間を超越した普遍性を持つ。

「習慣のまるごと把握」とは、行為者の性質叙述に繋がるものである。回想文テストをしてみれば、スルの性質叙述性が明らかになる。

これに対して、継続相シテイルが習慣的行為を表すのは、本来時間を超越しているはずの普遍相を持つ習慣行為が、何らかの理由で習慣的現在の局面をさしださなければならなくなった場合である。即ち、発話者が行為の連続から外側に飛び出さざるを得なくなった場合に、シテイル習慣が発話される。その場合とは、①現在を中心としたある時間帯に限られた行為が問題になっている場合、②行為者の行為を発話者が管理できない場合、③参照事態を外側からつきつけられた場合、の3つである。

キーワード：完成相 継続相 行為の開始と終了 運動の反復  
参照時間

# 習慣行為を表わすスルとシテイル<sup>1</sup> —性質叙述性と外部視点性—

吉田妙子

政治大学副教授

## 1. はじめに

スル・シタ・シテイル<sup>2</sup>のうち、日本語の動詞を学習する時、最初に導入されるのは不定形のスルであろう。例えば、『みんなの日本語』では、第4課で「わたしは 朝 6時に 起きます。」という例文が提出されているが、これは「日常の習慣」を表すと説明されている。しかし、さらに第28課で「毎朝、ジョギングをしています。」という例文が挙げられているが、こちらも「習慣」を表すと説明されている。砂川(1990)は初級日本語の文法解説書であるが、ここでは上記2つの例のいずれも「習慣・繰返し」と説明され(p.3、p.33)、さらに、副詞などによって期間が限定されている場合はシテイルを用い、単に現在の習慣を述べる場合はスルを用いる、とある(p.33)。しかし、これだけの説明で学習者がスルとシテイルを使い分けられるようになるとは思えない。事実、学習者の次のような誤用が頻繁に現われるのである。

(1) a [学生の作文] 私は、毎日NHKのニュースを見ます。

b 教師：聞く力を伸ばすには、字幕のないNHKの番組を  
見るといいですね。

学生：先生、私は毎日NHKのニュースを[\*見ます／見

---

<sup>1</sup> 本稿は、2003年日本語教育学会国際会議(12月・台北)で発表した論文を大幅に加筆訂正したものである。

<sup>2</sup> 本稿では、スル・シタ・シテイルという表記は述語動詞のテンス或いはアスペクトを表わし、また普通体だけでなく丁寧体も表わすものとする。ル形、タ形、テイル形、また、ル、タ、テイルという呼称もあるが、本稿では、スル、シタ、シテイルとする。また、本稿は、現在形、過去形、進行形などという呼称は、それぞれのアスペクトを全く顧慮しない混乱を招く呼称であると認め、排除すべきだという立場を取るものである。

ています]よ。

学生にとってみれば、作文の中で a の文を書いて正しいとされたのに、全く同じ意味の同じ文の「見ます」が b の会話中ではなぜ不適格になるのか、学生はすんなり理解できないであろう。(a の「見ます」は現在の自分の習慣を紹介しているが、b の「見ます」は「これから見るようにします」という決意を表すことになる。)

習慣を表すスルとシテイルの相違は、完成相と継続相の相違に起因する<sup>3</sup>。本稿では、完成相スルと継続相シテイルの表す習慣が異なる様相を呈するかを考察する。

## 2. 習慣を表さないスルとシテイル

奥田 (1977) は、完成相スルのアスペクチュアルな意味を「ひとまとまりのなかの動作あるいは変化」であるとし、高橋 (1998) は「動詞があらわす運動の過程を、(始発から終了までふくめて)まるごとのすがたでさしだす」(p.76)としている。

それに対し、継続相シテイルのアスペクチュアルな意味は、奥田 (1977) では「ひとまとまりの中の動作あるいは変化」であるとされ、高橋 (1998) では「動詞のさししめす運動 (動作または変化) を、持続過程 (をなす局面) のなかにあるすがたをさしだすことである」(p.76)とされている。完成相は動作をまるごと捉える視点で、継続相は動作のプロセスの一局面を捉える視点である。例えば、

(2) a 私は、山に登ります。

b 私は、山に登っています。

のうち、a は登山開始から下山終了までの全過程をまるごと頭に描きつつさしだし、b では汗を拭きながら山を上っている局面など登山の過程のいずれかをさしだしていることになる。

ここで簡単に、日本語教育におけるスルとシテイルの用法を概括しておこう。まず、スルは、

---

<sup>3</sup> 「完成相」「継続相」という術語は、奥田 (1977) による。

- a. 日常の習慣：「私は毎日、7時のニュースを見ます。」
  - b. 未来の動作：「来年、日本に行きます。」
  - c. 超時的真実：「プラスチックは熱に溶ける。」
  - d. 現在の存在：「木柵に動物園がある。」（「ある」「いる」だけ）
- また、シテイルは、

- a. 現在進行中の動作<sup>4</sup>：「私は今、勉強している。」
  - b. 動作・作用の結果状態：「火が消えている。」
  - c. 本来の状態：「このベランダは外に張り出している。」
  - d. 従事・婚姻・所有・居住等：「父は貿易会社で働いている。」
  - e. 反復習慣：「毎日NHKのニュースを見ている。」
  - f. 記録・経歴：「カントは70才でこの本を書いている。」
  - g. テイルのみ用いる動詞：「聳えている」「ありふれている」等
- このうち、スルはaとc、シテイルはeが本稿の考察範囲である。

また、シテイルのdは「習慣行為」と紛らわしいが、次の理由で考察対象からはずれられると思われる。動詞で表される行為にはそれぞれスケールがある。「ご飯を食べる」「テレビを見る」などは、数分から数時間という区切りで完成する日常多発の行為であるから完成相の使用が多くなるが、「結婚する」「住む」「勤める」などは、通常は数年から数十年の長いタームで完成される生涯的行為であるから、継続相の使用が多くなる。職業を紹介する際、「貿易会社で働いてい

---

<sup>4</sup> また、芸術作品のタイトル、例えば、ロダンの彫刻「考える人」の腰掛けて頭を垂れて顎に手を当てている彫像を見れば、どう解釈しても継続相である。この彫像は、何故「考えている人」と名づけられなかったのか。シャガールの絵画「サモワールを持つ男」「恋するライオン」「花咲く波止場」などの作品のタイトルも同様である。

芸術とは、瞬間の中に永遠を見出す営みである。さらに、芸術作品は鑑賞者が外側からまるごと捉えることのできるものである。これらの芸術作品で、継続状態をあえてスルによって表現するのは、瞬間の形象の中に永遠的な本質をまるごと表現するという芸術の本領を文法的に表現したものであろう。「雨が降ります 雨が降る」「雪は降る あなたは来ない」「夕焼け小焼けで日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る」などの文芸表現で、明らかに継続相であるにもかかわらずスルが用いられているのも、歌詞中の話者の視点から少し距離を置いてこの全貌を把握するスタンスからきていると考えられる。

ます」「大学で勉強しています」「塾を開いています」などと継続相を用いるが<sup>5</sup>、これらは貿易業・学業・教育業などに従事しているという状態を表わす一種のメタファーである。従事するという動作は長いタームを持つ動作であるから、職業紹介の場合は継続相が使われるわけであるが、これは「習慣行為」とは別物であると考えられる。

本稿では、奥田（1977）、高橋（1988）、鈴木（1999）らに倣って、完成相スルは行為の開始と終了までまるごとさし出すこと、継続相シテイルは行為の開始と終了を認知せず、行為のある局面をさし出すこと、という捉え方を基本とする。

### 3. スル習慣とシテイル習慣

本稿では、スルで表される習慣を「スル習慣」、シテイルで表される習慣を「シテイル習慣」と呼ぶことにする。

完成相が動作の開始から終了までをまるごとさし出すのだとすると、完成相スルによって示される習慣とは、まるごとの動作がいくつも連結した、いわば串刺しのダンゴのような図になるであろう。これは動作の単なる反復過程に他ならない。単発動作における完成相が動作をまるごと把握するのであるなら、習慣行為において捉えられた「まるごと習慣」とは開始時点と終了時点は最初から問題にされておらず、過去と未来に永遠に延びる普遍相を表すことになる<sup>6</sup>。

(2) a 私は、日曜日はいつも山に登ります。

b 私は、日曜日はいつも山に登っています。

a では、単に日曜日ごとの反復運動を示すだけで、反復の開始時点（いつからこの習慣が始まったか）と終了時点（いつこの習慣が

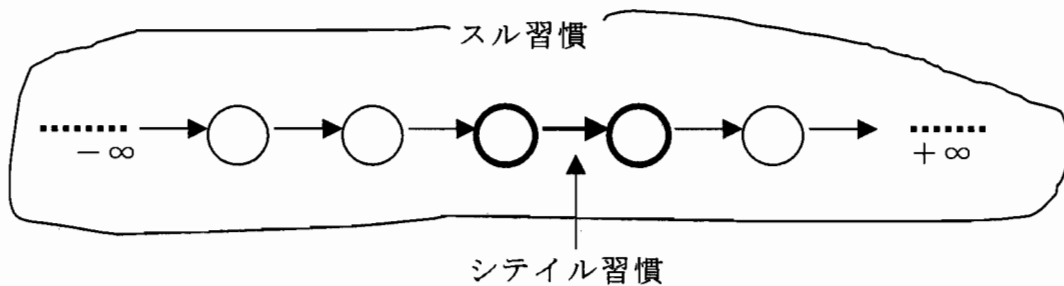
<sup>5</sup> 「結婚している」は、挙式の進行ではなく、婚姻状態の継続と言えよう。

<sup>6</sup> 「動作の開始と終了」と「習慣の開始と終了」とは意味内容が違う。「動作の開始と終了」とは、一回一回の単発動作の開始と終了を表す。例えば「食べる」という動作なら「いただきます」と箸を取る瞬間が「開始」で、「ごちそうさま」と箸を置く瞬間が「終了」である。これに対して、「習慣の開始と終了」とは、食事の習慣が始まった幼児期が「開始」で、食事の習慣が終わる死亡時が「終了」である。

終わるか)ということについては、語られていない。その証拠に、(2)' aの文に習慣の開始時点を示す副詞(句)を入れると、「私は若い頃から、日曜日はいつも山に登っています。」とシテイルを使わざるを得なくなるし、終了時点を示す副詞(句)を入れると、「私は年を取るまで、日曜日はいつも山に登ります。」と、スルを使うことになるものの、これは行為の決意を示す表現になってしまう。

これに対して、継続相シテイルによって示される習慣とは、ある連続する反復動作の途中の反復状況が、何らかの事情で切り出されて示されている。それ故、限られた時間帯における相対的な開始と終了の意味を持つことになる。例えば、bの文では、前後に連続する反復のある一時期の反復の局面だけをさしだしていることになる。

これを図示すれば、次のようになるだろう。(○は一回一回の行為を表す。)



この、「過去と未来に永遠に延びる普遍相」とは、スル習慣のどんな用法に転化するのだろうか。また、どのような状況の時に、いかにして、行為が「局面」的に捉えられる必要があるのだろうか。

#### 4. スル習慣の性質叙述性

定期的な反復運動には意志的反復動作と非意志的反復運動があるが、そのうちで意志的な運動が「習慣行為」である。例えば、子供が最初は歯磨きを嫌がっても、何度か繰返すうちに自然に日常のサイクルの中に組み入れられて抵抗なく行われるようになる。この



ように、習慣とは反復するうちに無意識に求められるようになることはあっても、本質的には意志的な行為である。従って、

(3) a 私は毎日、6時に起きる。

b 私は毎日、6時に目が覚める。

のうち、aは意志的行為であるから「習慣」、bは非意志的行為であるから単なる「反復」であって「習慣」とは言いがたい。また、

(4) a 私は毎日タバコを吸います。

b \*私は毎日タバコをやめます。

という例のように、意志的ではあっても明らかに習慣とは言えない行為がある。これは、Vendler (1967) の動詞分類によれば「到達動詞」にあたるものだが<sup>7</sup>、この種の動詞は常識的には習慣になり得ないものであるから、考察の対象にはしない。また、一部の状態動詞も同様である。

#### 4.1 習慣叙述から性質叙述へ

このスル習慣は、習慣の行為主体の性質を表わすことに繋がる。

(5) a 私の家では、日曜日はいつも刺身を食べる。

b 私の家の人たちは刺身が嫌いだけど、私は刺身を食べる。

c 日本人は刺身を食べる。

以上3種の「刺身を食べる」のうち、aの場合は明らかに、意志的にして定期的に反復される習慣行為である。しかし、bの場合は定期的な習慣行為を述べているのではなく、個人の嗜好を述べている。さらに、cは日本人の習慣を紹介しているが、やはり定期的な

---

<sup>7</sup> Vendler (1967) は、動詞を次の4つのカテゴリーに分類している。

1. 到達動詞 (Achievement) : 瞬間的に起こり、時間軸のある点に焦点が当てられる。(例 : lose, recognize, find, die, reach the summit)
2. 達成動詞 (Accomplishment) : ある持続期間を持っているが、いずれ終わる。(例 : paint a picture, run a mile, make a chair, build a house)
3. 活動動詞 (Activity) : ある持続期間を持っているが、必ずしも終わる必要がない。(例 : run, swim, walk, play,)
4. 状態動詞 (State) : 動的ではなく、他の外力が付加されることがない。(例 : see, know, believe, hate, want)

なお、この分類の日本語訳は影山 (1996) p.41、によるものである。

反復行為ではなく、日本人一般の性質を述べていると考えられる。

「日曜日」「いつも」など、周期性のある時間副詞がない場合は、習慣叙述ではなく性質叙述になる。(5)aの時間副詞を除くと「私の家では、刺身を食べる。」となり、行為の周期性が外されるので習慣性が感じられなくなり、家族の嗜好を述べていると感じられる。

行為の定期・不定期に関わらず、反復行為は蓄積すると、反復主体の「性質」と見なされるようになる。反復主体の「性質」とは、反復行為の総和的結果とも言える。

スルは、「事態をまるごと捉える完成相」であった(第2章)。上の図から見られるように、スルで表される反復運動は、過去と現在に果てしなく延びる、 $\pm\infty$ (プラスマイナス無限大)の運動であった(第3章)。この反復運動が永遠に続くなら、それは経験的には運動主体の普遍的な性質と考えられるであろう。開始と終了が確認されない運動の叙述とは、状態叙述に近いと言える。

スルの性質叙述性は、個別のもの反復行為よりも、類の反復行為(ないし反復運動)により強く現われる。

(5)c 日本人は刺身を食べる。

(6) プラスチックは熱に溶ける。

などは「日本人」「プラスチック」の反復行為ないし反復運動をまるごと捉えている叙述であるが、これは個別の「日本人」や「プラスチック」でなく、類としての「日本人」「プラスチック」の一般的性質を表す叙述に他ならない。

(7) 人間は、考える葦である。(パスカル)

これは、「人間の属性は思惟である」とする哲学者の言葉であるが、完成相の性質叙述性は哲学的な属性叙述<sup>8</sup>にまで及ぶわけである。

---

<sup>8</sup> ものの普遍的性質は、哲学的な意味での属性になることがある。平凡社哲学事典(1974)によると、属性とは「ある事物に属する性質、徴表をいうが、哲学の厳密な用法では事物がそれなしには考えられないような性質、事物の恒常なる根本的規定を意味し、様態、偶有性と区別する。」とある。即ち、ある事物の概念を分析すれば必然的に抽出されるような性質である。例えば、「菜食主義

以上の観察から、完成相スルは習慣行為から敷衍して行為主体の性質叙述になっていくこと、そして、行為主体が個物の場合よりも類の場合の方が性質叙述性が強いことが確認された。

#### 4.2 評価を表わすスル習慣

- (8) a 男：バカ言ってるんじゃないよ おまえのことだけは 一日たりとも忘れたことなどなかった俺さ  
女：よく言うわ いつも騙してばかりよ 私が何にも知らないとでも思っているのね  
男：よく言うよ 惚れたおまえの負けだぜ もてない男が好きなら俺も考え直すぜ（「3年目の浮気」より）
- b 愛人でいいのと歌う歌手がいて言ってくれるじゃないのと思う（俵万智「サラダ記念日」より）
- (9) （佐々木小次郎が切りつけた剣を、宮本武蔵がかわす）  
小次郎：おぬし、なかなかやるな。  
武 蔵：なんの、おぬしこそ、なかなか使うではないか。

「よく言う」「言ってくれる」「なかなかやる」「なかなか（剣を）使う」は、その場の言動（夫婦や歌手の言葉、武蔵が小次郎の剣をかわす、小次郎が武蔵に切りつける）そのものを指すのではなく、「そんなことを臆面もなく言うほどあなたはずうずうしい」「そんなことを言うほど人の気を知らない」「小次郎の剣をかわすほど武蔵は武芸の達人だ」「武蔵に切りつけた鋭さから見て、小次郎は相当の剣の使い手だ」など、行為主体の特性を表す形容詞的叙述なのである。

- (10) a まだ泣いてるの？ まったくよく泣くよ。  
b （鯨飲馬食している友達を見て）本当によく食べるなあ。
- これらは恒常的とは言えないにしろ、「泣く」「食べる」などの行為を行為者のある一面の固有の性質を評価している。
- スル習慣は、普遍的な反復行為だけでなく、ある局面で顕わになった特性を表わすこともある。その場合は、「よく」「なかなか」な

---

者」の属性は「動物性の食品を食べない」ということである。

どの評価を表わす副詞や、「てくれる」などの文末モダリティを伴って、行為者に対する評価を表わすのである。

#### 4.3 連体修飾節に現われるスルの性質叙述性

連体修飾節の中のスル習慣には、性質叙述性がいっそうはっきりと現われている。

(11) 女：お願い。私を捨てないで。

男：俺は、すぎる女は嫌いなんだ！

(12) 君、作る人。僕、食べる人。(食品のテレビコマーシャル)

(13) 愛する者を失った悲しみを癒せるのは、時間だけである。

これらの「女」「人」「者」は誰か個別の「女」「人」「者」を特定しているのではない。「VスルN」とは「Vするという性質を持ったN」のことで、「そういう種類の女」「そういう種類の人」「そういう種類の者」という、ある集合の内包を規定する用法である。形容詞と同様の機能を持つわけだから、性質叙述性が強い。(12)は女性の役割を決めつける男性中心主義として評判の悪かったかつてのコマーシャルであるが、これも「君が作って、僕が食べる」とすれば、普遍性が薄れてそれほど問題にはならなかったかもしれないと感じられるのである。これは対象を類別する連体修飾の制限的用法が、果ては対象の本質にまで言及する機能を持つに至った例だと考えられる。

なお、このことを傍証する事実がある。接続助詞のカラは「私が来たからには大丈夫です。」などのように助詞をつけることができるし、また「昨日休んだのは、風邪を引いたからだ。」などと、ダを伴って述語になることもできる故、タメ、トキなどの形式名詞と同様に、カラ節は副詞節であるとともに、名詞節の性格も持っていると言える。このカラ節の中で、スル習慣は連体修飾節の中と同様の振舞いをするのである。次の例は、原因の発生が過去のことであるにも関わらず、カラ節の中でスルが使われ得る場合である。

(14) a 妻：あら、今月、赤字だわ。

夫：君が訪問着なんか [作る / 作った] からだよ。

b A：彼、どうして帰っちゃったのかしら。

B:あなたが昔の彼のことなんか[言う/言った]からよ。

カラ節の中にスルが使われ得るということは、カラ節で表された理由が普遍的な理由であることを示すものではないだろうか。「訪問着なんか作れば、赤字になるのは当たり前だ」「昔の彼のことを言えば、彼が帰るのは当たり前だ」という、(話者にとっての)普遍的な因果の前提が潜んでおり、その普遍性故に相手も当然因果関係を知っているはずだという前提に立ち、知っていながらそのような行為を敢えてした相手の責任を追求し非難する言い方になる。(14)の各例では、スルが普遍的な因果を表しているのに対し、シタは一回限りの偶発的な因果を表している。それ故、シタにはもともと行為者を非難するニュアンスはないので、以下の例ではスルは使えない。

(14)' a 妻:あら、今月、赤字だわ。どうしてかしら。

夫:ほら、風呂場の修理を[\*する/した]からだよ。

妻:あ、そうか。

b A:彼、どうして帰っちゃったのかしら。

B:奥さんが電話[\*かけてくる/かけてきた]からよ。

また、因果関係に確信がない疑問文などではスル責任は使えない。

(14)" a 妻:あら、今月、赤字だわ。どうしてかしら。

夫:変だね。君が訪問着を[\*作る/作った]からかなあ。

b A:彼、どうして帰っちゃったのかしら。

B:さあ。あなたが昔の恋人のことを[\*言う/言った]

からとも思えないけど。

スルが名詞節の中では普遍相を持つことが、これで明らかになっただろうと思われる。

#### 4.4 回想文テスト

前節でスルで表わされた行為または事態は、過去のものとして回想される時、どのような表現になるであろう。

(8)' a (離婚した夫婦が婚姻時を回想して)

妻:いつも私を騙してばかりだったくせに、ほんとによく[??言った/言う人だった]わよ。

夫：惚れた自分の負けなのに、よく [??言った／言う奴  
だった] よ。

b かつて、愛人でいいのと歌った歌手がいた。[??言ってく  
れたじゃないの／言ってくれるじゃないのと思った]。

- (9)' (宮本武蔵と佐々木小次郎がお互いのことを回想する)  
小次郎：武蔵は、なかなか [??やった／やる奴だった]。  
武 蔵：小次郎は、なかなか [??(剣を)使った／使う  
奴だった]。

以上の回想文にシタの形を使うと、性質ではなく一回的な事実の  
回想になってしまう。非文ではないが、アスペクトが完全に違って  
くる。これは、「スル+名詞」の方が断然安定感がある。

この回想文テストは、連体修飾節の中のスル習慣に用いると、よ  
りはっきりしてくる。

(11)' 女：あの時、なぜ私を捨てたの？

男：おまえは [\*すがつた女だ／すがる女だった] からだ。

(12)' 君は [\*作った人だ／作る人だった]。僕は [\*食べた人だ／  
食べる人だった]。

(13)' [??愛した者／愛する者] を失った彼の悲しみを癒せるの  
は、時間だけであった。

連体修飾節の中をシタにすることは、前述の例文よりも非文性が  
強いと感じられる。

回想文にした場合、①シタの形で表わすと不自然になる、②「ス  
ル+名詞」の形で表す方がより自然になる、③シタでも「スル+名  
詞」の形でもよい、の順でスルの性質叙述性が高いと言えよう。

## 5. シテイル習慣の外部視点性

前章で、反復運動をする主体は、「類としての主体」と「個として  
の主体」があることを述べた。

(5) a 私の家では、日曜日はいつも刺身を食べる。

b 家の人たちは刺身が嫌いだけど、私は刺身を食べる。

- c 日本人は刺身を食べる。  
(6) プラスチックは熱に溶ける。

この動詞部分をシテイルに変えると、どうであろうか。

- (5)' a 私の家では、日曜日はいつも刺身を食べている。  
b ?家の人たちは刺身が嫌いだけど、私は刺身を食べている。  
c ??日本人は刺身を食べている。

a、b、cの順に習慣叙述性が低くなっていくようである。

また、反復運動をする主体が人でなく物体の場合は、どんな文脈でも反復性の叙述にはならないようである。

- (6)' \*プラスチックは熱に溶けている。

この文を非文にしないためには、

- (6)" プラスチックが熱に溶けている。(A piece of plastic is melting in the heart.)

としなければならないが、それでは現在進行状態を示すことになってしまう。助詞のガでマークされている(英語では不定冠詞でマークされている)ことからわかるように、「プラスチック」は、もはや類としての性格を失い、ある個別の「プラスチック」になってしまうのである。

運動主体が類である場合、特に物体である場合の習慣叙述は、シテイル習慣になりにくいようである。では、個別のものの習慣叙述は、いかにしてスルからシテイルへの転換が可能なのであろうか。

### 5.1 シテイルの外部観察性

高橋(1998)は、個々の運動について「完成相と継続相の対立は、運動をそこからガバツとつかまえるか、運動(またはその局面)のなかにはいつて、前後をキョロキョロながめるかの対立である」(p.77)と言う。個々の運動でなく、習慣行為において「運動をそこからガバツとつかまえる」というのは、プラスマイナス無限大(第3章の図)の運動連鎖を総括的につかむということであり、従って習慣の開始と終了が問題にならない場合であった。

そのようなスル習慣に対して、無限の行為の連鎖をある事情から

切り出し、相対的な開始と終了を持つのが、シテイル習慣であった（第3章）。そして、シテイル習慣が用いられるのは、習慣の総括的把握ができない場合であった。

(15) a 正雄は日曜日はいつも、山に登っています。

b 正雄は日曜日はいつも、山に登ります。

動作主が話者でない場合、話者は動作主「正雄」の登山習慣を毎週確認することはできず、例えば日曜日ごとに電話をかけると山に行っていて留守だと知るなど、部分的にしか認知できない。このような場合は、aのようにシテイルが使われる。しかし、話者が「正雄」の家族だとしたら、「正雄」の登山習慣を毎週把握している可能性があるので、bのようにスルを使うことも可能なのである。

しかし、話者が動作主の家族である場合には、スルと同時にシテイルも選べる。これは、まるで話者が外部の人間として振舞っているかのようである。これを藤城（1996）は、実際は他者のそうした動きを「見た」ということを報告する「外側からの描述」であると言い、「自分を行為の外側の立場の人間として位置付けることに」なる<sup>9</sup>（p.8）と言う。話者が行為者自身や行為者の家族でない時は、この「視点の外側性」は明らかであろう。

## 5.2 シテイルと話者の習慣行為管理能力

習慣をスルで述べることができるのは、行為者自身や行為者の家族だけではない。

(16) （日本料理屋の店員の会話）

a A：Y先生って、知ってる？

B：ああ、うちの店に来ると、いつもちらし寿司食べる人  
でしょ？

b A：Y先生って、知ってる？

<sup>9</sup> 藤城はシテイタの「感知の視点」を論じる中で、「鈴木君は？」「ああ、今日は10時ごろ〔出勤してきた／出勤してきた〕けど、今は外回りにでも行ってるんじゃないかな。」では、「出勤してきた」より「出勤してきた」の方が話者が「鈴木君」の行為をよくつかんでいる印象を与えるようだ、と述べている。



B : ああ、うちの店に来て、いつも日本語の本を読んでる人でしょ？

a の場合、日本料理屋の店員である B は、Y が店で「ちらし寿司を食べる」時、注文を受ける、料理を出す、皿を下げる、といった一連の行為により Y の食事行為を毎回管理する立場にもあるので、Y の習慣行為をまるごと把握することもできる故、Y の習慣をスルという完成相で表わすことが可能である。これに対し、Y が「日本語の本を読む」ことは B の管理下でない行為であるし、Y の読書行為を毎回確認しているとは限らない。こういった場合、行為の外側描述性は明らかであるから、シテイルで表わすことになる。

行為者が話者自身、話者の家族や秘書など、行為者の習慣行為を毎回確認する立場にある者は、スルを使う権限が強いと思われる。習慣叙述にスルを用いるか、シテイルを用いるかは、最終的には話者の行為者に対する「習慣管理能力」の有無にあると言える。

それでは、習慣行為の管理能力を有する立場の者がシテイル習慣を用いるのは、いかなる場合であろうか。

### 5.3 シテイルと参照時間

周知のように、シテイタを用いる時は「事件時間」(event time)、  
「参照時間」(reference time)、「発話時間」(utterance time または speech time) の 3 つが考えられる。

(17) 昨夜私が帰った時、妻はもう寝ていた。

この例文では、「事件時間」は「妻が寝た時間」であり、「参照時間」は「私が帰った時間」であり、「発話時間」はそれが語られた時間、すなわち「事件の翌日のある時間」である。

5. 1 で述べた「外側からの視点」が可能になるのも、「参照時間」の存在ゆえだと考えられる。藤城 (1996) は、「外側からの視点」は、外側に置いた話者自身の行為をさらに出来事全体の時間系列の中に位置付けることができる、とし、次の例を挙げる (p. 8)。

(18) 夢を見た。

今日ひきはらったあの部屋の台所の流しを、私は [\*みがい

た／みがいっていた]。(吉本ばなな「キッチン」より)

そして、これを「みがいた」とすると「前後の文のつながりが見えにくく、解釈が困難である」としている。これは、シテイタが発話される時は、外側と内側の二重の視点があるということに他ならない。藤城(1996)が一貫して述べている「シテイタにおける話者の感知の視点」も、実はこの「参照時間」の存在があつてこそ成立するのだと言えよう。

シテイルが語られる時、この「参照時間」は「発話時間」と重なっている。即ち、シテイルにおいて「参照時間」は「今」である。この「参照時間」の存在が外側からの視点と内側の視点をオーバーラップさせ、それによって習慣行為を表すシテイルにはスルとは違ったアスペクトが与えられるのである。

#### 5.4 シテイル習慣における参照事態

高橋(1998)は、完成相がなぜ現在の運動を表せないかということの説明として、発話時点の瞬間にまるごとの運動過程がおさまりきらないからだ、と述べている。しかし、継続相が現在の運動を表せる理由は、継続相が発話時点の瞬間に運動をおさめきれるからではなく、「それをまたいだ、持続過程をなす局面としてさしだせばよいからである」としている(p.80)<sup>10</sup>。「それをまたいだ、持続過程をなす局面としてさしだす」ということは、その前後に同質の運動が広がっているということである。ただ、何らかの事情でその局面を切り取らなければならないわけである。その事情とは、

(19) この頃、毎朝5時に起きている。

(20) いただいたハーブティは、毎日飲んでいます。

など、習慣行為が限られた時間内でしか成立しない(「この頃」とい

<sup>10</sup> 高橋(1986)、p.80、「完成相の非過去がなぜ現在の運動をあらわせないかといえば、現在、つまり話の時点という瞬間のなかに、始発から終了までをふくめたまるごとのすがたの運動過程がおさまりきらないからであり、継続相の非過去形がなぜ現在のことをあらわせるかといえば、それは現在という瞬間におさまるのでなく、それをまたいだ、持続過程をなす局面としてさしだせばよいからである。」

う副詞や、「いただいたハーブティ」は量の制限があることから、「限られた時間内の習慣」と読み取れる) 場合や、

(16) (日本料理屋の店員の会話)

b A: Y先生って、知ってる?

B: ああ、うちの店に来て、いつも日本語の本読んでる人  
でしょ?

などのように、習慣行為が話者の管理の及ばないところにある場合  
が一つ考えられる。しかし、次の例はどうであろうか。

(1) a (学生の作文) 私は、NHKのニュースを毎日 [見ます/  
見えています]。

b 教師: 聞く力を伸ばすには、字幕のないNHKの番組を見  
るといいですね。

学生: 先生、私は毎日NHKのニュースを [\*見ます/見  
ています] よ。

(21) a 私は毎朝ジョギングを [します/しています]。

b A: Bさんは健康ですね。何か秘訣でも?

B: ええ、毎朝ジョギングを [\*します/しています]。

(22) a 社員: 社長、午後はいつもいる?

秘書: えーと、毎週水曜の午後はゴルフに [行きます/  
行っています] が、それ以外はいつもいます。

b 社員: 社長、最近運動不足じゃない?

秘書: え? 毎週水曜の午後はゴルフに [\*行きます/行  
っています] から、そんなことはないと思いますが。

これらの例では、aではスルでもシテイルでも可能だが、bでは  
スルを使うと不自然になる。これらの行為は、行為者自身ないしは  
行為者の習慣行為を管理する立場の者の叙述である故、「外側性」を  
持つものではない。これらの習慣は、いかなる視点から「現在」が  
切り取られているのだろうか?

これらの例に共通なのは、いずれもaは単なる習慣行為の紹介で  
あるが、bには何らかの他の情報があり、それを処理するために習

慣行為の現在の局面を述べ立てている、ということである。すなわち、行為者の習慣行為を知らない者からの、行為者の「現在」へのアプローチがあるわけである。本来、時点というものを超越しているはずの習慣という行為に、外部の他者によって「習慣の現在」がフットライトを浴びせられてクローズアップされるのである。

シテイルまたはシテイタが発話される時には、必ず「参照時間」があるのであった(5. 3)。そもそもひとまとまりの「行為」というものが一定の時間内に行われるものであるのなら、我々は「行為」を通じて「時間」を認識するのであり、言い換えれば「行為」とは「時間」の別名であろう<sup>11</sup>。それならば、シテイルが発話される時には「参照時間」に代わって「参照事態」があると言えるだろう。過去から未来に均質に延びている習慣行為の「現在」を切り取るものは、この「参照事態」である。(1)では話者の習慣を知らない教師からNHKを見ることを勧められて、「私は現在もうすでに見る習慣を持っている」という側面を強調するため、シテイルが使われている。(21) b も(22) b も、行為者の現在のことについて問いかけられ、それに照応した答をするためにシテイルが用いられている。習慣行為を語る時にシテイルが用いられるのは、この外部の「参照事態」に触発された場合なのである。

本章の冒頭で、運動主体が類の場合はシテイル習慣を使いにくいと述べ、次のような例を挙げた。

(5)' c ??日本人は刺身を食べている。

しかし、この場合も、一般的な習慣の紹介でなく、例えば次のような外部観察の視点が入るなら、シテイル習慣で表わせるのである。

(5)" c 日本人は、刺身なんて生臭いものを食べているんだから、うっかりご馳走になったら大変だ。

最後に、習慣叙述と紛らわしいシテイルの用法に注意したい。

---

<sup>11</sup> 木村(1992) p.24~31、及び木村(1997)第4章、の観察によれば、離人症の患者はひとまとまりのコトが認識できなくなると同時に、時間の認識ができなくなるという。

(23) 本を〔読む／読んでいる〕人は知識が広い。

この例で、「読む人」は明らかに性質叙述である。回想文を作ると、

(23)' 彼は、本を〔読む人だった／\*読んだ人だ〕。

と、シタにならないからである。しかし、「読んでいる人」は、現在を切り取る参照事態が見当たらない故、習慣行為の叙述とは認定し難い。これは、工藤（1995）の言う「パーフェクト性」（「その本なら、一度読んでよ。」などの例）、鈴木（1999）の言う「以前の完成」（「船はとっくについています。そして、もう出航しました。」などの例）に当たるものであろう。

## 6. まとめ

習慣とは、周期性を持った反復行為である。反復される行為は、行為主体の性質とみなされるようになる。それ故、完成相で表わされる習慣叙述（スル習慣）は、性質叙述にも繋がってくる。習慣叙述と性質叙述の違いは、叙述に「毎日」「12月」「食後」など、ルーティンな性質を持つ時間副詞があるかないかである。そのような副詞があれば習慣叙述になり、なければ性質叙述になる（4. 1）。

一方、このスル習慣は、外部から参照事態の視点が入ってくると反復の連鎖が断ち切れ、継続相で表わされることになり、シテイル習慣となる。それ故、性質叙述スルは話者が誰であろうと叙述可能だが、習慣叙述は話者が当該の習慣行為を定期的に確認する立場にない外部者は、シテイルを使うことになる。

(24) a 私はタバコを吸います。

b Y先生はタバコを吸います。

これは「私」及びYという人物が愛煙家であるということを述べたもので、性質叙述と言えるから、本人も他人もスルが使える。

(24)' a 私は、昼休みによく校門の前でタバコを〔吸います／吸っています〕。

b Y先生は、昼休みによく校門の前でタバコを〔?吸います／吸っています〕。

これは「昼休み」というルーティン時間副詞があるから習慣叙述であるが、他人がY先生の習慣を述べているbの場合、話者はY先生の秘書でもなければ不自然である。昼休みに校門の前でタバコを吸うY先生を常に見かけるだけの学生などの立場だとしたら、やはり「吸っています」が自然であろう。

また、「習慣行為」とは、意志性の動作である（第4章）。

(5)c 日本人は刺身を食べる。

(6) プラスチックは熱に溶ける。

物に関するスル習慣は非意志性のものであり、性質叙述性が強い。その証拠に、参照事態に照らされてもシテイル習慣になりにくい。

(5)" c 日本人は、刺身なんて生臭いものを〔食べる／食べている〕んだから、うっかりご馳走になったら大変だ。

(6)" プラスチックは熱に〔溶ける／\*溶けている〕んだから、うっかり火のそばに置いたら大変だ。

これは、「物」が意志を持たないことによる。意志を持たない「物」は、内部の視点を持たない。内部の視点を持たないなら、当然「視点の外部化」も必要がなくなる。人間である話者は常に「物質」を管理する立場にあるから、シテイルは使えない。「視点の外部化」は、人間の習慣行為を語る際に生ずるのである。

意志性の習慣行為のうち、類的なもの<sup>1</sup>の行為を叙述する完成相は、個別のもの<sup>2</sup>の行為を叙述する完成相に比べて「視点の外部化」が起こりにくく、性質叙述に繋がりやすい。（第5章）

(5)a 私の家では、日曜日はいつも刺身を食べる。（習慣）

c 日本人は刺身を食べる。（性質）

その反対に、個別のもの<sup>2</sup>の行為を叙述する完成相は、継続相を用いたシテイル習慣になりやすい。

(5)' a 私の家では、日曜日はいつも刺身を食べている。

c ??日本人は刺身を食べている。（「食べている」は、(5)''のように、視点のよほどの外部性がないと無理。）

参照事態を持たない習慣叙述とは、単に習慣の紹介をする場合の

叙述である。紹介というのは、自己紹介であろうと他人が紹介する場合であろうと、紹介をする能力のある者がするのであるから、紹介者は本来習慣行為管理能力を持っているわけである。故に、単なる習慣の紹介をする時は、スルを使うことが多くなる。

参照事態を与えられた習慣叙述は、シテイルによって表わされる。

まず、時を表わす副詞などで外側から反復行為の時間帯を指定された場合である（例(19)(20)）。

次に、話者が行為者の行為管理能力を持たない場合、外側から「習慣の現在」に焦点を当てざるをえなくなる（例(16)(24)）。

さらにこの「外部視点性」は、習慣行為を外側から見る視点と内側から見る視点と、二重の視点をオーバーラップさせることになる。これは、行為者の習慣を知らない者に外部から「参照事態」をつきつけられ、本来無時間的であるはずの習慣行為をことさら「現在」という局面を切り取ってクローズアップしなければならなくなった場合である（例(1)(21)(22)）。

以上のことから、スル習慣とシテイル習慣が用いられる場合は、次の表のように整理できるであろう。

叙述の種類 運動・行為主体		反復	定期的反復（習慣行為）	
		性質叙述	参照事態・無	参照事態・有
類	物	スル	スル	スル
	人	スル	スル	スル・シテイル
個人	話者＝行為の管理者	スル	スル・シテイル	シテイル
	話者≠行為の管理者	スル	シテイル	シテイル

スル習慣とシテイル習慣は、明らかに相補分布をなしている。

日本語教育で問題になるのは、人間の習慣行為の場合であろう。人間の習慣行為を叙述する時、参照事態を持たない「一般的紹介」の場合と、外部視点による参照事態を持つ場合がある。このうち、

参照事態がない場合の類の叙述には、完成相しか使えない。参照事態を持つ場合は、いかなる場合でも継続相が使える。初級学習者には、「自己紹介やガイドなどの場面で、自分自身や家族、自国の習慣を一方向的に紹介する場合はスルを使う方がよいが、それ以外はシテイルを使う方がよい」と指導したらよいのではないかと思われる。

### 参考文献

岡野ひさの 1999「判明を示すタの用法」『日本語教育』102号

東京：日本語教育学会 1-10

奥田靖雄 1977「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『国語国文』8号 宮城：宮城教育大学

影山太郎 1996『動詞意味論—言語と認知の接点—』初版、東京：くろしお出版

木村敏 1992『時間と自己』第13版、東京：中公新書

木村敏 1997『自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学』初版、弘文堂：東京

許夏珮 2000『日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得に関する研究』（博士学位論文）東京：お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学

許夏珮 2002「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115号 東京：日本語教育学会 41-50

工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』初版、東京：ひつじ書房

工藤真由美 1998「非動词的述語のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』東京：至文堂 66-81

鈴木泰 1999「古代日本語のアスペクト—現代日本語と比較して」『台湾日本語文学報』14号 台北：台湾日本語文学会 1-23

砂川有里子 1990『セルフ・マスターズシリーズ2 する・した・している』初版、東京：くろしお出版



- 高橋太郎他 1998『日本語の文法 講義テキスト』東京
- 寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』初版、東京：くろしお出版
- 中村英子 1997「動作動詞テイル形の「反復」について—「反復」の解釈が生まれる諸条件—」『日本語教育』93号 東京：日本語教育学会 73-84
- 原沢伊都夫 1998「テアル形の意味—テイル形との関係において—」『日本語教育』98号 東京：日本語教育学会 13-24
- 藤城浩子 1996「シテイタのもうひとつの機能—感知の視点を表すシテイター—」『日本語教育』88号 東京：日本語教育学会 1-12
- 林達夫他監修『哲学事典』1974 初版、東京：平凡社
- 松田文子 1998「眼前事態描写における「タ」の機能」『日本語教育』97号 東京：日本語教育学会 71-82
- 宮崎和人 2000「名詞文のテンス的意味の考察」『日本語教育』106号 東京：日本語教育学会 7-16
- 吉田妙子 1999「副詞「もう」が呼び起こす情意性—中国語話者の「もう」の使用に於ける母語干渉—」『日本語教育』101号 東京：日本語教育学会 61-70